

# 茶業史研究の取り組みと歴史的資料の活用

栗倉大輔（静岡県立大学グローバル地域センター）

ここでは、主に近代日本の茶業史研究の変遷を辿っていくとともに、その研究環境の現状を確認します。さらに、研究に必要な歴史的資料の活用、およびその保存・管理についても考えていきたいと思えます。

## 茶業史研究は魅力がないのか！？

茶業史研究、これは文化的なものというよりかは、今回の展示会のテーマに共通する産業・経済・貿易といったなかでの茶の歴史の研究を意味しています。もちろん、茶の湯、茶文化の研究も重要であることは言うまでもありません。しかしながら、それと比べると、**経済史や産業史のなかでの近代日本の茶の歴史研究は現在までのところ、それほど進んでいないのが現状です。**

ポスター展示「日本茶業・茶貿易の160年」の最初のグラフで表示されていますが、同じ主要輸出品といっても、茶の輸出額割合と生糸のそれとの差は時代を経ていくごとに歴然としていきます。このことは、生糸の輸出が日本経済はもちろんのこと、製糸業をはじめとする日本の産業にも大きな影響を及ぼしたことを意味しているといえるでしょう。一方で、確かにグラフをみても、茶および茶輸出の日本経済への影響は一時的であるともいえます。そのことからでしょうか、日本経済史研究の領域では、製糸業研究が戦前から続けられ発展・深化をみせていく反面で、茶業史研究はそれほど進展せず、また経済史研究の世界でも注目を浴びない時期が長く続きました。

しかしながら、**1980年代以降徐々にではありますが、研究が進んでいきます。**実際に、**角山栄『茶の世界史』（中央公論社、1980年）、寺本益英『戦前期日本茶業史研究』（有斐閣、1999年）、栗倉大輔『日本茶の近代史』（蒼天社出版、2017年）**と、それぞれの茶業史・茶貿易史を体系化する研究者が現れてきました。そのほかにも、蘭字研究の第一人者の**井手暢子氏**、同じく蘭字のほか日本茶広告の研究でも第一線を行かれている**吉野亜湖氏**、広く東アジアの視点から茶業史・茶貿易史を研究されている**戸部健氏**などが精力的に研究をなされています。ここにきて、茶業史研究は脚光を浴びつつあるといえるでしょう。

## 研究会・懇話会など研究の土壌の整備・拡充

また、**研究の進展のためには、研究報告や、資料などについての情報交換、また研究者・関係者同士の相互交流などを行う学会・研究会・懇話会の場が欠かせません。**そのことに関しては、企画展・シンポジウムなどの場も同じく重要な場であるといえます。近年では以下の表にみられるような様々な研究会や企画が発足・展開しています。静岡県内でのものが多いですが、表中の「幕末・明治の茶業と日米交流史研究会」は茨城県の猿島（さしま）茶の歴史的研究を行っていました。また、磨田顕寛氏のご報告は、狭山茶業や狭山茶の輸出に関するものです。このように、**静岡県以外の茶産地でも、経済史や産業史の視点からの茶の歴史研究が進展しつつあります。**

### 近年の茶業史研究関連の主な出来事

発足・発表・期間の年月	出来事
2015年9月～11月	・企画展「蘭字と印刷」（於フェルケール博物館）
2017年10月～12月	・展示「戦後の蘭字ーアフリカと中東へ輸出された日本茶ー」（於フェルケール博物館、開催期間中の10月21日に、シンポジウム「日本茶輸出と戦後の蘭字」開催）
2017年4月～19年3月	・「幕末・明治の茶業と日米交流史研究会」の活動（茨城県）
2018年2月	・「静岡茶の世界を考える懇話会」発足
2019年2月	・さいたま市立博物館学芸員・東アジア歴史文化研究所研究員の磨田顕寛氏の報告「さいたまの茶葉 大海を渡る」開催（第116回茶学の会、於袋井南コミュニティセンター）
2019年3月	・ふじのくに茶の都ミュージアム客員研究員制度の発足 ・シンポジウム「東アジアの視野からとらえた日本茶ー近代史から探る日本茶の輸出戦略ー」開催（茶の都しずおか創造セミナー、於静岡県男女共同参画センター あざれあ）